

NISA 概要レポート 2026 年第 1 四半期

投資信託市場への純資金流入額は史上初の 6 兆円超え

モーニングスター

2026 年 4 月 3 日

目次

- 2 主なポイント
- 3 NISA 買付動向
- 4 NISA 年初一括買い
- 6 資金フロー動向
- 12 まとめ

元利 大輔

モーニングスター・ジャパン

マネジャー・リサーチ部長

+81 3 4510-5492

daisuke.motori@morningstar.com

重要事項

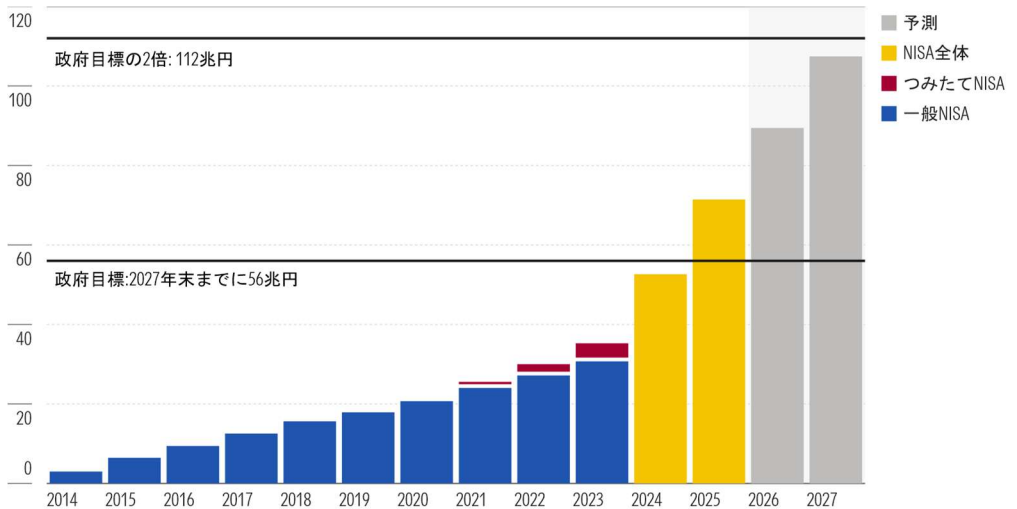
Morningstar のアナリストの行為は、倫理規程/職業行為規範ポリシー、個人の証券等取引（またはこれに準ずる）ポリシーおよび投資調査ポリシーによって規定されています。利益相反に関する詳細については、以下をご覧ください。

global.morningstar.com/equitydisclosures

概要

新 NISA（少額投資非課税制度）は 3 年目に入り、累計買付額は 2027 年には 100 兆円を超えるペースで活用が進んでいる。日本の投資信託市場においても、NISA を起点とした個人マネーの流入は一段と拡大している。本レポートでは、NISA の買付動向や年初一括買いの広がり、2026 年第 1 四半期における投資信託市場の資金フローなどをデータに基づき多角的に分析した。市場の不安定さが増す局面においても投資家の行動は比較的冷静であり、長期投資や分散投資を志向する動きがどのように表れているのかを明らかにする。

図表 1 NISA 累積買付額は 2027 年末には 100 兆円越えも



出所: 金融庁公表データより Morningstar Research が作成。単位は兆円。各年における NISA 買付額の推移を示している。2026 年および 2027 年の予測値は、年間 18 兆円の買付額があると想定したもの。

主なポイント

- ▶ NISA 買付額は過去最高を更新
2025 年の NISA 年間買付額は 18 兆円超となり、累計買付額は 71 兆円に達した。年間 18 兆円ペースが維持されれば、2027 年末には累計 100 兆円突破が視野に入る。
- ▶ つみたて投資枠は買付額が増加するものの、新規投資家の伸びは鈍化
NISA の年間買付額の増加分の大半はつみたて投資枠によるものだが、増加ペースは 2025 年後半に鈍化しており、新規のつみたて投資家の拡大が今後の焦点となる。
- ▶ 年初一括買いが広がり、2026 年第 1 四半期の資金流入は過去最高水準
NISA の年初一括買いを背景に、2026 年第 1 四半期の公募追加型株式投資信託への純資金流入額は 6 兆円を超え、四半期ペースで過去最高となった。市場変動が大きかった 3 月も、パニック売りのような資金流出は見られなかった。
- ▶ 長期投資では「タイミング追求」より分散と継続が重要
シミュレーション分析では、10 年投資では一括投資と分割投資の平均リターンに大きな差はなく、分割投資は結果のブレ幅を抑える効果が確認された。非課税制度を活用しつつ、資産配分の分散が投資家にとって重要である。
- ▶ 低コストの世界株式・米国株式インデックス・ファンドに引き続き資金が集中
純資金流入上位には低コストの株式インデックスファンドが並び、一部ファンドは純資産総額 10 兆円を突破した。一方で、毎月分配型株式ファンドや金関連、アロケーション型への資金流入も確認された。
- ▶ テーマ型ファンドでは資金の向かう先が変化
半導体やインド株といった過去の人気テーマから、AI を支える基盤技術・インフラ関連へと資金が移行しており、テーマの盛衰が短いサイクルで入れ替わる傾向が改めて浮き彫りとなった。

NISA 買付動向

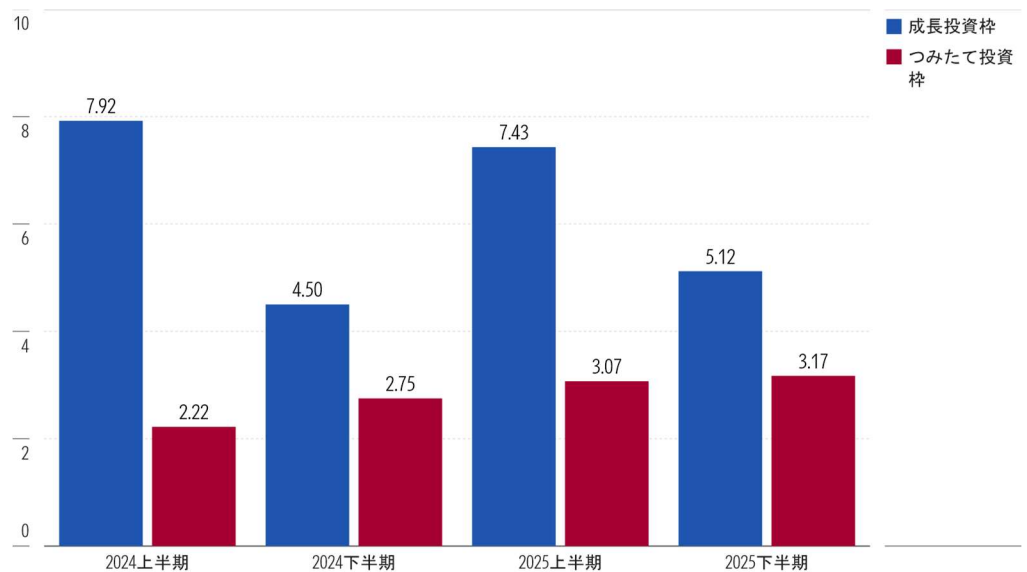
新 NISA 開始後 2 年目となる 2025 年も、NISA の利用状況は好調であった。金融庁が 2026 年 2 月に公表した NISA 利用状況統計によると、2025 年の NISA 口座における年間買付額は 18 兆 7,935 億円となり、2024 年から 1 兆 4,114 億円増（8%増）となった。この結果、NISA 全体の 2014 年からの累計買付額は 71 兆 4,295 億円となり、年間 18 兆円の買付ペースが維持されれば、2027 年末までに累計買付額は 100 兆円を突破し、当初政府が目標としていた 56 兆円の約 2 倍に達する見通しである。

2025 年上半期（1～6 月）は、市場の不確実性の高まりなどを背景に買付額の増加ペースが鈍化し、前年同期比では 3,667 億円増（4%増）にとどまった。一方、下半期（7～12 月）は日経平均株価が 5 万円を突破するなど株式市場が好調に推移したこともあり、NISA での買付額は前年同期比 1 兆 447 億円増（14%増）と大幅に伸びた。

成長投資枠とつみたて投資枠の内訳を見ると、2025 年の通年では成長投資枠が 12 兆 5,534 億円、つみたて投資枠が 6 兆 2,401 億円であった。成長投資枠の買付額は 2024 年と同水準であり、1,390 億円増（1%増）にとどまった。一方、つみたて投資枠は 1 兆 2,723 億円増（26%増）と、NISA 買付額全体の増加分の大半を占めた。

ただし、つみたて投資枠の増加ペースには鈍化がみられる。半年ごとに比較すると、2025 年上半期のつみたて投資枠の買付額は 2024 年下半期比で 3,217 億円増（12%増）であったものの、2025 年上半期から下半期への増加は 968 億円（3%増）にとどまった（図表 2）。これは、買付額自体は減少していないので、既存のつみたて投資利用者が継続して投資を行っている一方で、新規のつみたて投資開始者が徐々に減少している可能性を示唆するものである。今後、2027 年に開始予定の「こども NISA」を含め、新規投資家層への NISA 活用が広がるかが注目される。

図表 2 新 NISA 開始後からの半年ごとの買付額推移

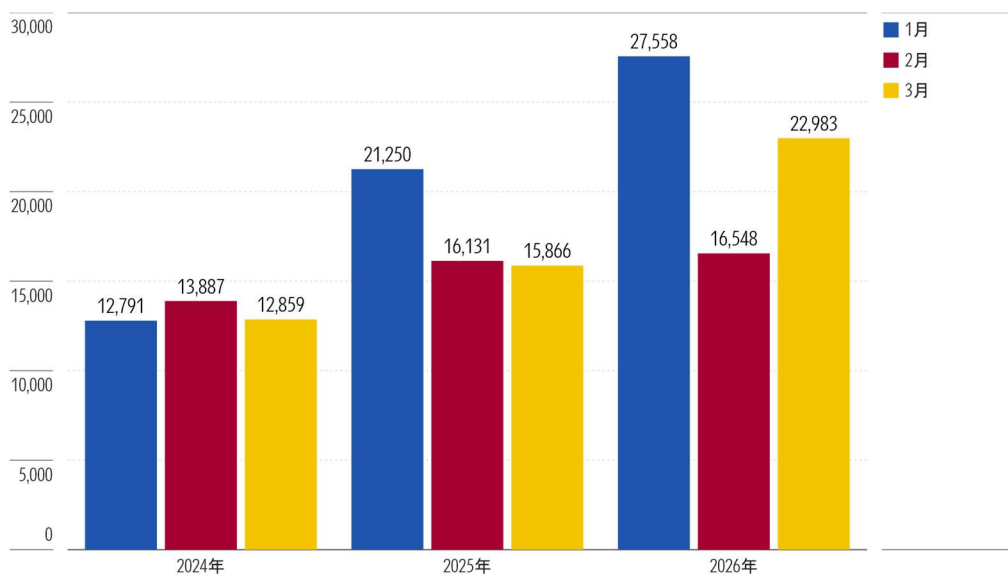


出所: 金融庁公表データより Morningstar Research が作成。単位は兆円。

NISA 年初一括買い

昨年から顕著になっている動きとして、NISA における「年初一括買い」が挙げられる。これは、年が明けた時点でその年の（成長投資枠の）非課税枠をまとめて使い切る投資行動である。実際、図表 3 が示す通り、2025 年および 2026 年の投資信託流入額はいずれも 1 月だけで 2 兆円を超えており、年初に多額の資金が流入していることから、この傾向はデータ上も確認できる。

図表 3 新 NISA 開始後の各年 1-3 月の投資信託市場への純資金流入額（億円）



出所: Morningstar Direct。日本籍公募株式追加型投資信託への純資金流入額。2026 年 3 月は推計値、それ以外は実績値。

では、なぜ年初一括買いが行われるのか。一括投資を支持する論拠としては、

- ▶ 期待リターンがプラスである限り、早く投資したほうが理論上有利である
- ▶ 過去データによるシミュレーションでは、一括投資が積立投資を上回る結果が多い

などの点が挙げられ、これらを根拠に「一括投資のほうが良い」とする主張が一定数存在する。

一方で、積立投資を支持する立場では、時間分散による安心感や、シミュレーション上の最終金額に大きな差がみられない点を根拠に、「積立投資が望ましい」とする。また、「両者の差は限定的であるため、どちらでもよい」とする意見もある。

ただし、これらの議論の多くは、毎年まとまった資金を保有し、それを毎年一括もしくは 12 回に分けて投資することを前提としているケースが多い。しかし、実際の投資家が毎年まとまった資金を準備できるとは限らず、そもそもまとまった資金がある投資家が資金を毎月均等に分けるという行動を検討するとも限らない。

そこで本分析では、より実務的な視点から以下の条件で比較を行い、その結果を図表 4 に示している。

- ▶ 年年初一括投資（1月の月初）と、年 4 回（1月・4月・7月・10月の月初）に等分して投資するケースを比較
- ▶ 投資対象は米国株式・グローバル株式・日本株式
- ▶ 投資期間は 1 年および 10 年
 - ※分割投資の場合、4 月分以降の資金は投資までの期間、金利ゼロで手元に保有していたと仮定

図表 4 年年初一括投資と年 4 回分割投資の比較シミュレーション

| | 米国株式 | | 世界株式 | | 日本株式 | |
|------------------|--------|---------|--------|---------|--------|---------|
| | 年年初一括 | 年 4 回分割 | 年年初一括 | 年 4 回分割 | 年年初一括 | 年 4 回分割 |
| 投資期間 1 年 | | | | | | |
| 平均 | 13.0% | 9.1% | 12.0% | 8.4% | 8.3% | 5.4% |
| 最高 | 61.8% | 34.3% | 50.7% | 29.6% | 54.6% | 36.5% |
| 最低 | -48.9% | -39.8% | -52.7% | -43.1% | -41.5% | -31.7% |
| 投資期間 10 年 | | | | | | |
| 平均 | 11.0% | 10.9% | 9.1% | 9.0% | 5.8% | 5.7% |
| 最高 | 21.2% | 19.8% | 17.0% | 15.8% | 13.1% | 12.3% |
| 最低 | -1.8% | -0.7% | 0.0% | 1.4% | -1.8% | -1.6% |

出所: Morningstar Direct。投資資金を年年初一括、または年 4 回（1/4/7/10 月初）分割投資した場合の、1 年および 10 年のリターンの平均、最高、最低。米国株式は Morningstar 米国株式指数、グローバル株式は Morningstar グローバル株式指数、日本株式は Morningstar 日本株式指数。全て税引前配当込み。2001 年から 2025 年のデータでシミュレーション。運用費用は控除していない。

図表 4 の通り、投資期間が 1 年の場合は一括投資のほうが年率平均リターンは高い。一方、10 年では両者の平均リターンにほとんど差はみられない。また、最終結果のブレ幅（最高値と最低値の差）は分割投資のほうが小さい。これらの結果は、まとまった資金が手元にある場合でも、投資初期のタイミング依存度を下げるために一定の時間分散を行うことが有効である可能性を示唆している。長期投資を前提とするならば、年年初一括投資にこだわらず、資金を複数回に分けて投資する行動が、リスク管理の観点から合理的であると考えられる。

資金フロー動向

全体

2026 年第 1 四半期（1-3 月）における日本籍公募株式追加型投資信託への純資金流入額（設定額から解約・償還額を差し引いた金額）は、前年同期の 5 兆 3,248 億円から 1 兆円以上増加し 6 兆 7,089 億円となり、四半期ベースでは史上初となる 6 兆円越えとなった（図表 5）。1-3 月はいずれの月も 1 兆円を超える純流入を記録し、特に 1 月は過去最高となる 2 兆 7,558 億円の純資金流入を示した。前セクションで述べたとおり、この背景には NISA における年初一括買いの影響が大きく、今年 1 月の純流入額が前年同月比で 6,000 億円以上増加した結果、第 1 四半期全体でも前年を大きく上回る水準となった。

一方、3 月は中東情勢の緊張が高まり、市場の変動が大きかったものの、投資信託市場への純資金流入額は 2 兆円を超え、前年同月を大きく上回った。この動向から、投資信託市場では投資家のパニック売りに相当する行動は見られず、市場変動に対して一定の落ち着きを維持していることがうかがえる。

分析対象を一般公募ファンド（約 4,200 本）に限定した場合、第 1 四半期の純資金流入額は 5 兆 8,933 億円となった。このうち、NISA 対象ファンドへの純資金流入額は 5 兆 6,121 億円であり、NISA 対象ファンドが引き続き純流入の大部分を占めている状況である。

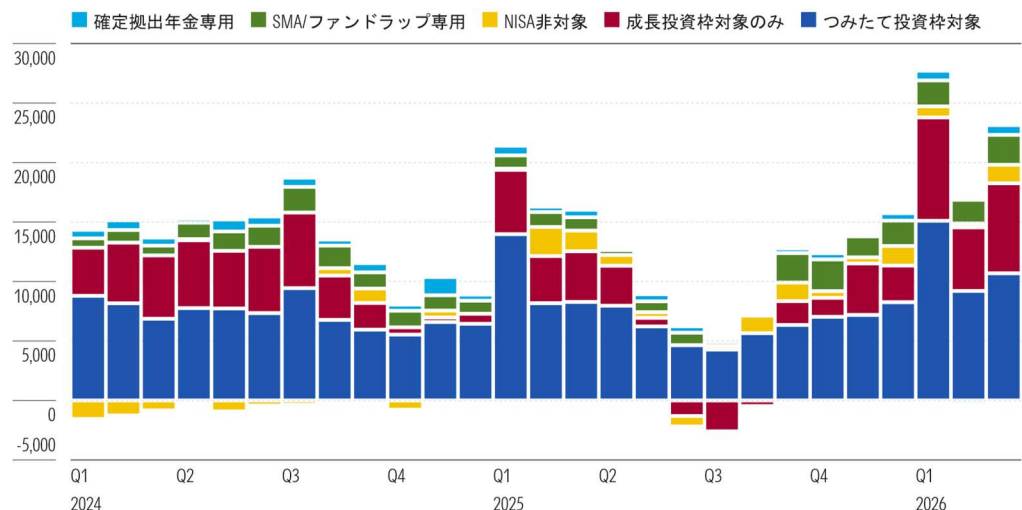
図表 5 2026 年第 1 四半期の純資金流入額（億円）

| ユニバース | 2026 年第 1 四半期 | 前年同期 | 2026 年 1 月 | 2026 年 2 月 | 2026 年 3 月 |
|------------|---------------|--------|------------|------------|------------|
| 全ファンド | 67,089 | 53,248 | 27,558 | 16,548 | 22,983 |
| うち NISA 対象 | 56,855 | 44,122 | 23,429 | 14,863 | 18,556 |
| 分析対象ファンド | 58,933 | 47,881 | 24,558 | 14,719 | 19,657 |
| うち NISA 対象 | 56,121 | 43,589 | 23,627 | 14,390 | 18,097 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。

1-2 月の純資金流入額は実績値、3 月の純資金流入額は推計値。（以降も同じ）

図表 6 純資金流入額推移（億円）



出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。

純資金流入上位ファンド

2026 年第 1 四半期の純資金流入上位（図表 7）には、前期から引き続き低コストの株式インデックスファンドが並んだ。1 位は「**eMAXIS Slim 全世界株式（オール・カントリー）**」、2 位は「**eMAXIS Slim 米国株式（S&P500）**」であり、両ファンドの四半期純資金流入額は合計で約 1.8 兆円となった。この旺盛な資金流入を背景に、両ファンドは四半期中に純資産総額が 10 兆円を突破した。単独ファンドとして純資産 10 兆円を超えるのは日本初であり、NISA を中心とした長期積立需要がこれらのインデックスファンドの規模を急速に押し上げている。

一方で、アクティブ・ファンドにも資金は流入している。3 位の「**インベスコ世界厳選株式オープン〈為替ヘッジなし〉（毎月決算型）**」のように、毎月分配型の株式ファンドが一定の純流入を確保している点は、インカム重視の投資家層が依然として存在していることを示している。さらに、金価格上昇や地政学リスクの高まりを背景に、「**ピクテ・ゴールド（為替ヘッジなし）**」、「**三菱 UFJ 純金ファンド**」、「**ROBOPRO ファンド**」など複数の金関連ファンドやアロケーション型ファンドも上位に入った。

テーマ関連ファンドに目を向けると、構図の変化が明確である。「**マテリアル・イノベーション戦略株式ファンド**」など、AI を支える技術やインフラをテーマとしたファンドは資金流入を記録したものの、2 年前には圧倒的な人気を誇った半導体関連ファンドやインド株ファンドは資金流出が目立った。投資テーマが半導体ブームから AI 関連基盤へと移行しつつあることがうかがえると同時に、テーマの盛衰が急速に入れ替わるテーマ型ファンド特有の資金フロー・パターンも確認できる。本来は中長期的な成長を見据えて投資する性質のテーマであっても、投資家（および販売員）は市場環境や話題性の変化に敏感に反応し、投資行動が短期化している可能性を示唆している。

図表 7 純資金流入額上位 30 ファンド (2026 年第 1 四半期)

| ファンド名 | モーニングスター・カテゴリ | 運用会社 | インデックス・ファンド | NISA対象 | 純資金流入額 (億円) |
|---|------------------|----------|-------------|--------|-------------|
| 1 eMAXIS Slim 全世界株式(オール・カントリー) | 外国株式・世界型 | 三菱UAM | Yes | Yes | 11,971 |
| 2 eMAXIS Slim 米国株式(S&P500) | 外国株式・米国型 | 三菱UAM | Yes | Yes | 5,940 |
| 3 インバスコ 世界厳選株式オープン(為替ヘッジなし)(毎月決算型) | 外国株式・世界型 | インバスコ | No | No | 4,128 |
| 4 ビクテ・ゴールド(為替ヘッジなし) | コモディティ | ビクテ | Yes | Yes | 2,501 |
| 5 フィデリティ・グロース・オポチュニティ・ファンド Dコース (毎月決算・予想分配金提示型・為替ヘッジなし) | 外国株式・世界型(除く日本) | フィデリティ投信 | No | No | 1,980 |
| 6 マテリアル・イノベーション戦略株式ファンド(為替ヘッジなし) | 株式・セクター型・テクノロジー | 三井住友DS | No | Yes | 1,266 |
| 7 WCM 世界成長株厳選ファンド(予想分配金提示型) | 外国株式・世界型 | 朝日ライフAM | No | No | 1,255 |
| 8 eMAXIS Slim 国内株式(TOPIX) | 国内株式・大型ブレンド型 | 三菱UAM | Yes | Yes | 1,237 |
| 9 ROBOPROファンド | アロケーション・積極型 | SBI岡三 | No | Yes | 1,194 |
| 10 三菱UFJ純金ファンド | コモディティ | 三菱UAM | Yes | Yes | 1,160 |
| 11 楽天・プラス・オールカントリー株式インデックス・ファンド | 外国株式・世界型 | 楽天投信 | Yes | Yes | 1,084 |
| 12 SBI・iシェアーズ・ゴールドファンド(為替ヘッジなし) | コモディティ | SBI AM | Yes | Yes | 1,074 |
| 13 あおぞら・新グローバル分散ファンド(限定追加型)2026-01 | アロケーション・安定型 | あおぞら投信 | No | No | 1,061 |
| 14 楽天・プラス・S&P500インデックス・ファンド | 外国株式・米国型 | 楽天投信 | Yes | Yes | 865 |
| 15 ハイベータ日本株フォーカス・ファンド | 国内株式・大型ブレンド型 | 大和AM | No | Yes | 857 |
| 16 iFreeNEXT FANG+インデックス | 外国株式・特定テーマ/セクター型 | 大和AM | Yes | Yes | 824 |
| 17 eMAXIS Slim 国内株式(日経平均) | 国内株式・大型成長型 | 三菱UAM | Yes | Yes | 757 |
| 18 ニュートン・パワー・イノベーション・ファンド(為替ヘッジなし) | 外国株式・特定テーマ/セクター型 | 三井住友DS | No | Yes | 744 |
| 19 ノムラ・ジャパン・オープン | 国内株式・大型ブレンド型 | 野村AM | No | Yes | 650 |
| 20 たわらノーロード 先進国株式 | 外国株式・世界型(除く日本) | AM-One | Yes | Yes | 577 |
| 21 eMAXIS Slim 全世界株式(除く日本) | 外国株式・世界型(除く日本) | 三菱UAM | Yes | Yes | 549 |
| 22 グローバル・ロボティクス株式ファンド(年2回決算型) | 株式・セクター型・テクノロジー | アモーヴァ | No | Yes | 490 |
| 23 のむらっぴ・ファンド(積極型) | アロケーション・やや積極型 | 野村AM | No | Yes | 486 |
| 24 iFree S&P500インデックス | 外国株式・米国型 | 大和AM | Yes | Yes | 482 |
| 25 ビクテ・ゴールデン・リスクリスクプレミアム・ファンド | アロケーション・やや積極型 | ビクテ | No | Yes | 461 |
| 26 フィデリティ・グロース・オポチュニティ・ファンド Bコース(為替ヘッジなし) | 外国株式・世界型(除く日本) | フィデリティ投信 | No | Yes | 451 |
| 27 ゴールド・ファンド(為替ヘッジなし) | コモディティ | アモーヴァ | Yes | Yes | 450 |
| 28 グローバル・ロボティクス株式ファンド(1年決算型) | 株式・セクター型・テクノロジー | アモーヴァ | No | Yes | 447 |
| 29 日経225ノーロードオープン | 国内株式・大型成長型 | AM-One | Yes | Yes | 441 |
| 30 SBI・V・S&P500インデックス・ファンド | 外国株式・米国型 | SBI AM | Yes | Yes | 440 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。色掛けは第 4 四半期中の新設ファンドを示す。

新規設定ファンドの動向

2026 年第 1 四半期に新設された一般公販ファンドは 61 本となり、前年同期の 71 本をやや下回った。新規設定ファンドの資金流入動向を見ると、素材分野をテーマとする「**マテリアル・イノベーション戦略株式ファンド（為替ヘッジなし）**」が設定月である 3 月に 1,000 億円超の純資金流入を記録し、期間内の新設ファンドの中で圧倒的な存在感を示した点が際立つ（図表 8）。また、「**ハイベータ日本株フォーカス・ファンド**」は、堅調な日本株式市場を背景に当初 2 カ月で 611 億円の流入を集めた。ただし、同ファンドは名称の通り高ベータ株を主な投資対象とするため、市場環境によっては値動きが大きくなりやすい特徴を持つ。市場上昇時には高いパフォーマンスが期待できる一方、市場下落局面では下落幅が拡大する可能性があり、投資家は留意が必要だろう。

一方、資産分散のニーズを背景に、コモディティ関連の新規設定も引き続き存在感を示した。「**楽天・ゴールド・ファンド**」や「**Tracers オール・カントリー・ゴールドプラス**」など、金を投資対象とするファンドには安定した投資家からの資金流入が見られた。また、世界的に金利水準が数年前と比較して上昇している環境も追い風となり、債券や転換社債（CB）戦略を採用した新規設定ファンドでも、インカム需要を取り込む形で着実な資金流入が観察された。

図表 8 新設ファンド上位 10 ファンド（2026 年第 1 四半期）

| ファンド名 | モーニングスター・カテゴリ | 運用会社 | 設定日 | NISA対象 | 当初2ヵ月純資金流入額(億円) |
|--|-----------------|--------|-----------|--------|-----------------|
| 1 マテリアル・イノベーション戦略株式ファンド(為替ヘッジなし) | 株式・セクター型・テクノロジー | 三井住友DS | 3/13/2026 | Yes | 1,266 |
| 2 あおぞら・新グローバル分散ファンド(限定追加型)2026-01 | アロケーション・安定型 | あおぞら投信 | 1/30/2026 | No | 686 |
| 3 ハイベータ日本株フォーカス・ファンド | 国内株式・大型ブレンド型 | 大和AM | 1/26/2026 | Yes | 611 |
| 4 楽天・ゴールド・ファンド(為替ヘッジなし) | コモディティ | 楽天投信 | 1/21/2026 | Yes | 199 |
| 5 Tracers MSCIオール・カントリー・ゴールドプラス | トレーディング・フルベア型 | アモーヴァ | 3/6/2026 | No | 184 |
| 6 あおぞら・新グローバル・プレミアム・ファンド(当初漸増期間付、限定追加型)2026-01 | アロケーション・安定型 | あおぞら投信 | 1/30/2026 | Yes | 166 |
| 7 ニッセイ/シュローダー好利回りCBファンド2026-03(為替ヘッジなし・限定追加型) | 外国債券・転換社債型 | ニッセイAM | 3/17/2026 | No | 109 |
| 8 インターナショナル・オポチュニティ・ファンド(為替ヘッジなし) | 外国株式・世界型 | AM-One | 1/23/2026 | Yes | 88 |
| 9 ニュートン・量子技術関連株式ファンド | 株式・セクター型・テクノロジー | SBI岡三 | 2/26/2026 | Yes | 88 |
| 10 HSBCグローバル・ターゲット利回り債券ファンド2026-03(限定追加型) | 外国債券・世界型(円ヘッジ) | HSBC | 3/3/2026 | No | 82 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。当初 2 カ月純資金流入額は、設定月とその翌月の純資金流入額の合計値。2026 年 3 月の新規設定ファンドは 1 カ月分のみ値を表示している。

資産クラス、カテゴリ別

資産クラス別（図表 9）にみると、株式型ファンドへの純資金流入が圧倒的に多い傾向は 2026 年第 1 四半期においても変わらなかった。第 1 四半期の株式型ファンドへの純資金流入額は、分析対象ファンド全体で 4 兆 9,633 億円に達し、NISA 対象ファンドに限っても 4 兆円を超えて前年同期を上回った。

債券型ファンドおよび REIT 型ファンドは、引き続き資金流出基調が続いた。第 1 四半期の純資金流出額は、債券型が 1,151 億円、REIT 型が 1,182 億円と、それぞれ 1,000 億円を超えた。一方、アロケーション型および金関連ファンドを含む「その他」資産クラスには資金が流入した。アロケーション型は 5,627 億円、「その他」は 6,006 億円とともに前年同期を大きく上回り、株式型ほどの規模ではないものの、分散投資を意識した投資家の行動が第 1 四半期も継続したといえる。株式偏重の流れが依然として強いものの、一部の投資家は市場環境を踏まえ、リスク低減や資産分散を目的にアロケーション型や金関連ファンドを組み入れる動きを強めている。

長期投資において、経済成長や複利効果の恩恵を享受するために株式などのリスク資産を相対的に多く保有することは合理的である。しかし、すべての投資家にとって株式への偏りが最適とは限らず、リスク許容度に応じた資産配分の重要性はむしろ高まっている。2025 年頃からみられ始めた分散投資志向は 2026 年第 1 四半期も続いており、今後も株式に加えてアロケーション型や債券型などを組み合わせた、よりバランスの取れたポートフォリオ構築が求められる。

図表 9 2026 年第 1 四半期の資産クラス別純資金流入額（億円）

| 資産クラス | 分析対象全体 | | NISA 対象 | |
|---------|---------------|--------|---------------|--------|
| | 2026 年第 1 四半期 | 前年同期 | 2026 年第 1 四半期 | 前年同期 |
| 株式 | 49,633 | 45,205 | 43,370 | 38,294 |
| 債券 | -1,151 | -1,431 | 467 | 471 |
| REIT | -1,182 | -475 | -237 | 152 |
| アロケーション | 5,627 | 2,879 | 6,586 | 3,137 |
| その他 | 6,006 | 1,702 | 5,934 | 1,466 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。

カテゴリ別の資金フロー動向（図表 10）をみると、2025 年第 4 四半期から大きな変化は見られない。従来と同様に、世界株式や米国株式の各カテゴリ、ならびに金関連ファンドを含むコモディティのカテゴリが、純資金流入額の上位を占めた。3 月には市場の不安定さが増したものの、これらのカテゴリから純資金流出へ大きく転じる動きは見られず、投資家が市場の急変にも比較的冷静に対応していることが示唆される。

一部のテーマ型およびセクター型ファンドに対して大きな資金流入が見られたことから、テクノロジー・セクター株式のカテゴリも上位にランクインした。また、国内株式・大型の 3 つのカテゴリはいずれも純資金流入額で上位 10 位に入ったが、月次ベースで見るとその動きには違いが見られた。

日経平均株価に連動するインデックス・ファンドを多く含む国内株式・大型成長型のカテゴリでは、2 月に日経平均株価が 6 万円近い水準まで上昇した局面において資

金流出が見られた。一方、3月に市場が急落した局面では逆張りの投資行動が確認され、3月単月では3,000億円を超える純資金流入となった。これに対し、TOPIX 連動型インデックス・ファンドを多く含む国内株式・大型ブレンド型や、高配当株ファンドを含む国内株式・大型割安型のカテゴリでは、市場の乱高下にもかかわらず、比較的安定した資金流入が継続した。

同じ国内株式を対象とするカテゴリであっても、このような差が生じた背景としては、日経平均株価が報道などで最も取り上げられる指数であり、多くの投資家にとって馴染み深い存在であることが挙げられる。その結果、ニュースに即応して売買しやすい投資対象として、日経平均株価に連動するインデックス・ファンドが用いられやすく、一部ではトレーディング・ツールとして活用されている可能性がある。この点が、国内株式・大型成長型のカテゴリが他の2カテゴリとは異なる資金動向を示した一因と考えられる。

一方で、国内株式・大型ブレンド型や国内株式・大型割安型のファンドに投資する投資家は、相対的に中長期的な視点を重視しているとみられ、短期的な指数変動に左右されにくい投資行動が資金フローにも表れている。

図表 10 2026 年第 1 四半期純資金流入出額上位 10 カテゴリ (億円)

| 純資金流入額上位 10 カテゴリ | | 純資金流出額上位 10 カテゴリ | |
|------------------|--------|--------------------------|--------|
| カテゴリ | 純流入額 | カテゴリ | 純流出額 |
| 外国株式・世界型 | 21,285 | アロケーション・やや安定型 | -1,100 |
| 外国株式・米国型 | 9,055 | 外国株式・インド型 | -858 |
| コモディティ | 6,366 | 外国債券・世界型 (除く日本、円ヘッジ) | -717 |
| 外国株式・世界型 (除く日本) | 4,912 | 外国 REIT・米国型 | -612 |
| 国内株式・大型ブレンド型 | 4,497 | 外国株式・米国型 (円ヘッジ) | -266 |
| 国内株式・大型成長型 | 3,679 | 外国 REIT・世界型 | -249 |
| アロケーション・やや積極型 | 2,794 | 外国債券・ハイブリッド証券・世界型 (円ヘッジ) | -229 |
| 株式・セクター型・テクノロジー | 2,497 | 国内株式・中小型成長型 | -221 |
| 国内株式・大型割安型 | 1,981 | 外国株式・世界型 (円ヘッジ) | -216 |
| アロケーション・積極型 | 1,851 | 国内 REIT | -189 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。

レーティング別

過去のカテゴリ内におけるリスク調整後リターンを相対比較に基づいて算出されるモーニングスター・レーティング別に見ると、5つ星および4つ星ファンドへの純資金流入が引き続き顕著であった。また、アクティブ・ファンドについては、2つ星および1つ星ファンドから純資金流出が見られた。これは、投資家がファンド選定にあたり、過去のパフォーマンスを参考にする傾向を強めていることの表れと考えられる。

もっとも、過去に良好なパフォーマンスを示したファンドであっても、将来にわたり同様の実績を維持するとは限らない。この点を補完する指標として位置付けられるのが、アナリストによる定性評価と、その評価を反映した定量モデルから構成されるモーニングスター・メダリスト・レーティングである。モーニングスター・メダリスト・レーティング別の資金フローを見ると、インデックス・ファンドについ

ては、金、銀、銅の高評価を受けたファンドに資金が大きく流入している。一方で、アクティブ・ファンドでは、同様の明確な傾向は確認されていない。

図表 11 レーティング別純資金純流出入額（億円）¹

モーニングスター・レーティング別

| 2026 年第 1 四半期 | | |
|---------------|--------|--------|
| レーティング | アクティブ | インデックス |
| ★★★★★ | 4,210 | 8,575 |
| ★★★★ | 369 | 18,927 |
| ★★★ | 5,150 | 2,478 |
| ★★ | -2,070 | -76 |
| ★ | -496 | -11 |
| 対象外 | 9,845 | 12,032 |

モーニングスター・メダリスト・レーティング別

| 2026 年第 1 四半期 | | |
|---------------|-------|--------|
| レーティング | アクティブ | インデックス |
| 🏆 Gold | -35 | 8,947 |
| 🥈 Silver | 329 | 17,167 |
| 🥉 Bronze | 1,863 | 2,100 |
| Neutral | 1,609 | 3,257 |
| Negative | 4,979 | 258 |
| 対象外 | 8,267 | 10,196 |

出所: Morningstar Direct より Morningstar Research にて計算。

まとめ

新 NISA 開始後 2 年目となる 2025 年は、NISA の利用拡大が一段と進み、年間買付額は 18 兆円を超えて過去最高を更新した。特につみたて投資枠が NISA 全体の成長を牽引した一方で、その増加ペースには鈍化が見られ、新規投資家の拡大が今後の課題として浮き彫りとなっている。また、2026 年第 1 四半期には、NISA における年初一括買いの広がりを背景に、投資信託市場全体で四半期ベースとして過去最高水準の資金流入が記録された。3 月の市場不安定化局面においても大きな資金流出は見られず、投資家が中長期的な視点を保ち、比較的冷静に行動している点は注目される。

資金フローの内訳を見ると、低コストの株式インデックス・ファンド、とりわけ世界株式および米国株式を対象とするファンドへの資金集中が続いている。一方で、金関連ファンドやアロケーション型ファンドにも一定の資金流入が見られ、資産分散を意識した投資行動も確認された。また、テーマ型ファンドでは、半導体やインド株といった過去に人気を集めたテーマから、AI を支える基盤技術やインフラ関連へと資金の向かう先が変化しており、テーマの盛衰が比較的短いサイクルで入れ替わる傾向が改めて浮き彫りとなった。

¹各ファンドのレーティングは毎月計算されるため、モーニングスター・レーティング別については資金流入月の前月末基準のレーティング、モーニングスター・メダリスト・レーティング別は前々月末基準のレーティングをそれぞれ用いて分類し集計している。

市場の不安定さが増す環境下において、投資家にとって重要となるのは、非課税制度を最大限活用しつつも投資タイミングを過度に追求しないことや、特定の資産クラスに偏り過ぎないことである。本分析が示す通り、長期投資では一括投資と分割投資の平均リターンに大きな差は見られない一方、分割投資は結果のブレ幅を抑える効果がある。株式を中核に据えながらも、アロケーション型や債券など株式以外の資産クラスを組み合わせ、自身のリスク許容度に応じた分散投資を行うことが、今後の不確実な市場環境においても持続的な資産形成につながると考えられる。○

Morningstar Manager Research Services ディスクロージャー (日本)

モーニングスター・マネジャー・リサーチについて

モーニングスター・マネジャー・リサーチは、運用商品の戦略に対し、独立の立場からのファンダメンタル分析を提供しています。運用担当者 (People)、運用プロセス (Process)、運用会社 (Parent) の 3 つの主要な評価軸についてのアナリストのリサーチに基づく見解は、モーニングスター・メダリスト・レーティングとして公表されます。世界中のリサーチチームが、投資商品、資産クラス、および各地域にまたがる戦略について、詳細なアナリスト・レポートを発行しています。メダリスト・レーティングは、意見であり、事実の表明するものではなく、将来のパフォーマンスを示唆または保証するものでもありません。

モーニングスター・マネジャーリサーチ・サービスについて

モーニングスター・マネジャーリサーチ・サービスは、モーニングスターのファンドリサーチ・レポート、レーティング、ソフトウェア、ツール、およびモーニングスター独自のデータの提供と、モーニングスターのマネジャーリサーチ・アナリストへのアクセスを同時に実現させています。銀行、ウェルスマネジャー、保険会社、政府系ファンド、年金基金、エンダウメント (寄贈基金)、財団などの機関投資家が、内部で行うデューデリジェンスを補完する機能を提供しています。モーニングスターのマネジャー・リサーチ・アナリストは、Morningstar, Inc. のさまざまな完全子会社 (Morningstar Research Services LLC (USA)、Morningstar UK Ltd、および Morningstar Australasia Pty Ltd が含まれますが、これらに限定されません) に所属しています

お問い合わせ先

Morningstar Manager Research Services
ManagerResearchServices@Morningstar.com



モーニングスター・ジャパン株式会社
東京都港区新橋 1-1-1 日比谷ビルディング 6 階

©2026 Morningstar. All Rights Reserved. 別段の合意がない限り、本資料は配信者の所在する国においてのみ使用することができます。本資料に記載されている情報、データ、分析、意見は、投資助言ではなく情報提供のみを目的としたもので銘柄の売買を推奨するものではありません。また、情報の正確性や完全性を保証するものでもありません。本資料の内容は、記載された日付時点のものであり、予告なく変更されることがあります。モーニングスターは、法律により定められている場合を除き、本資料の情報、データ、分析、意見を利用して行ったいかなる投資の判断、損失、損害に責任を負いません。本資料にはモーニングスターの専有情報が含まれており、モーニングスターから事前の書面による承諾がない限り、当資料の一部あるいは全ての複製ならびに再配布等の使用はできません。過去のパフォーマンスは、必ずしも金融商品の将来のパフォーマンスを示唆するものではありません。リサーチに関するライセンス利用のお問い合わせは+1 312 696-6869までご連絡ください。